

渾沌未分

岡本かの子

青空文庫

小初は、跳ね込み台の櫓の^{やぐら}上板に立ち上った。腕を額に翳して、
 空の雲気を見廻した。^{みまわ}軽く矩形に^{くけい}擡げた右の上側はココア色に日
 焦けしている。腕の裏側から脇の下へかけては、さかなの背と腹
 との関係のように、急に白く柔くなつて、何代も都会の土に住み
 一性分の水を呑んで系図を保つた人間だけが持つ^さ冴えて緻密な凄
 みと執拗な^{しつよう}鞣^{じゅうせい}性を^{ふく}含んでいる。やや下ぶくれで唇が小さく
 咲いて出たような天女型の美貌だが、額にかざした腕の陰影が
 顔の上半をかげらせ大きな尻^{しり}下りの眼が少し野獣^{やじゅう}じみて光つ
 た。

額に翳した右の手先と、左の腰盤^{ようばん}に当てた左の手首の釣合^{つりあ}い

が、いつも天候を気にしている職業人のみがする男型のポーズを
小初にとらせた。中柄ちゆうがらで肉の締しまっているこの女水泳教師の薄うす
い水着下の腹輪の肉はまだ充じゆうぶん分ぶん発達しない寂さびしさを見せては
いるが、腰こしの骨盤は蜂型はちにやや大きい。そこに母性的の威容いようと逞たく
ましい闘志とうしとを潜ひそましている。
蒼空あおぞらは培養硝子ばいようガラスを上から冠かぶせたように張り切ったまま、温う
気んきを籠こもらせ、界限かいがい一面の青蘆あおあしの洲すはところどころ弱々しく戦おの
いている。ほんの局部的な風である。大たい鬱結うつけつした暑氣の天
地だ。荒川あらかわ放水路が北方から東南へ向けまず二筋になり、葛かさい
西川橋がわの下から一本の大幅おおはばの動きとなつて、河口を海へ融とか
している。

「何わかという判らない陽気だろう」

小初は呟つぶやいた。

五日後に挙行される遠泳会の晴雨が氣遣きづかわれた。

西の方へ瞳ひとみを落すと鈍い焰ほのおが燻いぶつて来るように、都会の中央か

ら市街の瓦屋根の汜かわら濫はんらんが眼まなこを襲おそつて来る。それは砂町一丁目と

上大島町の瓦斯ガスタンクを堡壘ほるいのように清砂通りに沿う一線と八幡やわた

通りに沿う一線に主力を集め、おのおの三方へ不規則に蔓延まんえんし

ている。近くの街の屋根瓦の重ちやうじよう畳おどは、躍おどつて押し寄せるよう

に見えて、一々は動かない。そして、うるさいほど肩かたの数を聳そびか

している高層建築と大工場。灼しやく熱ねつした塵埃じんあいの空に幾いく百ひやく

筋も赫あかく爛ただれ込んでいる煙突えんとつの煙けむり。

小初は腰の左手を上へ挙げて、額に翳している右の腕に添え、
眩まぶしくないよう眼底まびさしを深くして、今更いまさらのように文化の燎りようば
原んに立ち昇のぼる晩夏の陽炎かげろうを見入つて、深い溜息ためいきをした。

父の水泳場は父祖の代から隅田川岸すみだがわに在つた。それが都会の
新文化の発展に追除おいのけられ追除たてかわけられして、小名
木川筋ぎがわに移り、場末の横堀よこぼりに移つた。そしてとうとう砂村のこ
の材木置場の中に追い込まれた。転々した敗戦のあとが傷ましく
ずっと数えられる。だが移つた途端とたんに東京は大東京と劃かく大だいされ
砂村も城東区砂町となつて、立派に市域の内には違ちがいなかつた。
それがわずかに「わが青海流は都会人の嗜たしなみにする泳ぎだ。決し
て田舎いなかには落したくない。」そういつている父の虚栄心きよえいしんを満足

させた。父は同じ東京となった放水路の川向うの江戸川区には移り住むのを極度に恐れた。葛西という名が、旧東京人の父には、市内という観念をいかにしても受付けさせなかった。ついに父は荒川放水を逃路の限りとして背水の陣を敷き、青海流水泳の最後の道場を死守するつもりである。

このように夏稼ぎの水泳場はたびたび川筋を変えたが、住居は今年の夏前までずっと日本橋区の小網町に在った。父は夏以外ふだんの職業として反物のたとう紙やペーパーを引受けていた。和漢文の素養のある上に、ちよつと英語を習った。それでアドレスや請求文を書いて、父はイギリスの織物会社からしきりにカタログを取り寄せた。中や表紙の図案を流用しながら、自分の

意匠いしょうを加えて、画工に描き上げさせ、印刷屋に印刷させて、問屋の註文ちゅうもんに应じていた。ちらしや広告の文案も助手を使つて引き受けていた。

だが地元の織物組合は進歩した。画工も進歩した。今更中間のブローカー問屋や素人しろうとの父の型の極きまった意匠など必要はなくなつた。父の住居附つきのオフィスは年々寂寥せきりようを増した。しばらく持ち堪こたえてはいたが、その後いろいろな事業に手を出した末が、地所ぐるみ人に取りられた。その前に先祖から伝えられていた金も道具も失なくしていた。だからこの夏期は夜番と云いいつくろつて父娘やこ二人水泳場へ寝泊りねとまりである。

駸々しんしんと水泳場も住居をも追い流す都会文化の猛威もういを、一面灰

色の焰の屋根瓦に感じて、小初は心の髓すいにまで怯えおびを持ったが、しかししばらく見詰みつめていると、怯えてわが家没落ぼつらくの必至の感を深くするほど、不思議とかえって、その猛威がなつかしくなつて来た。結局は、どうなりこうなりして、それがまた自分を救ってくれる力となるのではあるまいかと感ぜられて来た。その都会の猛威に対する自分のはらはらしたなつかしさは肉体さえも抱かかえ疎すくめられるようである。このなつかしさに対しては、去年の夏から互たがいに許し合っている水泳場近くの薄給はつきゆう会社員の息子薫少年むすかおるとの小鳥のような肉体の戯たわむれはおかしくて、想い出すさえ恥はじを感ずる。

それに引きかえて、自分への興味のために、父の旧式水泳場を

この材木堀に無償^{むしょう}で置いてくれ、生徒を世話してくれたり、見張りの船を漕^こいでくれたりして遠巻きに自分に絡^{から}まっている材木屋の五十男貝原を見直して来た。必要がいくらでも好みに変つて来たのであろうか。小初は自分の切ない功利心に眼をしばだいた。

とにかく、父や自分の仇敵^{きゆうてき}である都会文化の猛威に對して、少しも復讐^{ふくしゅう}の氣持が起らず、かえつて、その逞ましさに慄^{ふる}えて魅^み着^{ちやく}する自分は、ひよつとして、大變な錯倒^{さつとう}症^{しょう}の不良娘^{むすめ}なのではあるまいか。だが何といつても父や自分の魂^{たましい}の置場はあそこ——都会——大東京の真中よりほかにないのだから仕方がない、是非もない……。

「小初先生。時間ですよ。翡翠^{シヨールビン}の飛込みのお手本をやつて下さい」

水だらけの子供を十人ばかり乗せ、櫓台の下へ田舟^{たぶね}を漕ぎ近づけて、材木屋の貝原が、大声を挙げた。飛驒訛^{ひだなま}りがそう不自然でなく東京弁に馴^{じゅん}致^ちされた言葉つきである。

「お手本をも一度みんなに見せといて、それからやらせます」
脂肪^{しぼう}づいた小富豪^{しょうふうこう}らしい身体^{からだ}に、小初と同じ都鳥^{もん}の紋^{もん}どころの水着を着て、貝原はすっかり水泳場の助手になり済ましている。小初はいつもよりいくらか滑^{なめ}らかに答えた。

「いますぐよ。少しぐらい待つてよ」

だが、息づまるような今までの気持からいくらか余裕^{よゆう}をつけよ

うとして、小初はもう一度放水路の方を見やった。一めん波が菱ひ立しだつて来た放水路の水面を川上へ目を遡さかのぼらせて行くと、中川筋と荒川筋の堺さかいの堤つつみの両端やぐを扼やくしている塔橋とうきよう型がたの大水門の辺に競走のような張りを見せて舟々は帆ほを上げている。小初の声は勇んだ。

「確かだわ。今晚は夕立ち、明日から四五日お天気は大丈夫だいじようぶよ」

「まあ、そんなところですか。遠泳会はうまく行くね」
てのひら

掌を差し出して風の脈ふに触れてみてから貝原は相槌あいづちを打った。

肩や両脇りようわきを太紐ふとひもで荒くかがつて風の抜ぬけるようにしてあ

る陣羽織じんばおり式の青海流の水着を脱ぬぐと下から黒の水泳シャツの張

り付いた小初の雄勁ゆうけいな身体が剥むき出された。こういう職務に立

つときの彼女かのじよの姿態に針一突つきの間違まちがいもなく手間の極致つくを尽して彫ほり出した象牙細工ぞうげのような非人情的な完成が見られた。人間の死体のみが持つ虚静の美をこの娘は生ける肉体に備えていた。小初は、櫓板の端にすらりと両りようまた股またを踏み立て、両手を前方肩の高さに伸のばし、胸を張って呼吸を計った。やや左手の眼の前に落ちかかる日輪は爛ただれたような日中のごみを風に吹き払はらわれ、ただ肉桃色にくもいろ ほんの盆ぼんのように空虚に丸い。

ざわざわ鳴り続け出した蘆洲たおの、ところどころ幾筋も風筋に当る部分は吹き倒たおれて泡あわをたくさん浮うかした上げ潮が凩なぎあとの蘆洲の根方にだぶつくのが覗のぞける。

青海流の作法からいうと翡翠の飛込み方は、用意の号令で櫓の

端へ立ち上つて姿勢を調べ、両腕を前方へさし延べるときが挙動
の一である。両手を後へ引いて飛込みの姿勢になるときが二で、
跳ね出す刹那せつなが三の、すべてで三挙動である。いま小初は黙だまつて
「一」の動作を初めたが、すぐ思い返して途中とちゆうからの「二」と
号令をかけ跳び込みの姿勢を取った。

それは、まったく翡翠かわせみが杭の上から魚影うかがを覗のぞう敏捷びんしやうでしか
も瀟灑しやうしやな姿態である。そして、このとき今まで彫刻ちやうこく的に
見えた小初の肉体から妖艶ようえんな雰囲ふんいきが月暈つきがさのようにほのめき
出て、四圍の自然の風端の中に一箇こ不自然な人工的生々しい魅み
惑わくを搔かき開かせた。と見る間に「三！」と叫さけんで小初は肉体を軽
く浮び上らせ不思議な支えの力で空中の一箇所かしよでたゆたい、そこ

で、見る見る姿勢を逆に落しつつ 両脚を梶のように後へ折り
 曲げ両手を突き出して、胴はあくまでしなやかに反らせ、ほとん
 ど音もなく水に体を鋤き入れた。

目を眩しそうにぱちつかせて、女教師の動作の全部を見届けた
 貝原は

「型が綺麗だなあ」

と思わず嘆声を挙げてやや晦冥になりかけて来た水上三尺
 の辺を喰い付きそうな表情で見つめた。

都会の中央へ戻りたい一心から夢のような薫少年との初恋を
 軽蔑し、五十男の世才力量に望をかけて来た転機の小初は、翡
 翠型の飛込みの模範を示す無意識の中にも、貝原に対して異性の

罍わなを仕込んでいた。子供のうちから新舞蹈ぶようを習わせられ、レヴュウ・ガールとも近附ちかづきのある小初は、媚こびというねたねたしたものを近代的な軽快な魅力に翻訳ほんやくし、古典的な青海流の飛込みの型にそつと織り込ますことぐらい容易である。生ぬるい水中へぎゅーんと五体がただ一つの勢力となつて突入とつにゆうし、全皮膚ひふの全感覚が、重くて自由で、柔軟じゆうなんで、緻密な液体に愛撫あいぶされ始めると何もかも忘れ去つて、小初は「海豚いるかの歓びよろこ」を歓び始める。小初の女学校時代からのたった一人の親友、女流文学者豊村女史にある時、小初は水中の世界の荒唐無稽こうとうむけいな歓びを、切れ切れの体験的な言葉で語つた。すると友達はその感情に關係ある的確な文学的表現を紹介しょうかいした。

クッションというなら全部クッションだ。

羽根布団はねぶとんというなら全部羽根布団だ。

だが、水の中は、溶とけて自由な

もつといいもの——愛。

跳はねて破されず、爪割さいて

搔むしき　らりようか——愛。

それで海豚イルカは眼を細めている。

一生、陸に上らぬ。

これは希臘ギリシアの擬古狂詩ギョウキヤウシの断片をざっと翻譯したものだそうだ。

それと同じような意味を父の敬蔵けいぞうは老莊ろうそうの思想から採って、

「渾沌未分の境涯きょうがい」だといつも小初に説明していた。

まぶた
瞼に水の衝動しょうどうが少くなると小初は水中で眼を開いた。こど

もの時分から一人娘を水泳の天才少女に仕立てるつもりおおけの父親敬

蔵は、かなり厳しい躰しつけ方をした。水を張った大桶おおけの底へ小石

を沈しずめておいて、幼い小初に銜くわえ出さしたり、自分の背に小初を

負うたまま隅田川の水の深瀬ふかせに沈み、そこで小初を放して独りで

浮き上らせたり、とにかく、水というものから恐怖きょうふを取り去り、

親しみを持たせるため家伝を倍加して小初を躰しづけた。

水中は割合に明るかった。磨硝すりガラス子色に厚みを保って陽気でも

陰気でもなかった。性を脱いでしまった現実の世界だった。黎れいめ

明といえは永遠な黎明、黄昏たそがれといえは永遠に黄昏の世界だつ

た。陸上の生活力を一度死に晒し、実際の影響えいきよう力を糺なめして

しまい、幻まぼろしに溶かしている世界だつた。すべての色彩しきさいと形が水

中へ入れば一律に化生せしめられるように人間のモラルもここで

は揮発性と操持性とを失つた。いわば善悪が融着ゆうちやくしてしまつ

た世界である。ここでは旧套きゆうとうの良心過敏性かびんにかかつている都

会娘の小初の意地も悲哀ひあいも執着しゆうちやくも性を抜かれ、代つて魚介ぎょかい

鼈すっぽんが持つ素朴不逞そぼくふていの自由さが蘇よみがえつた。小初はしなやかな胴を水に

よじり巻きよじり巻き、飽あくまで軟柔なんじゆうの感觸かんしよくを楽んだ。

小初は掘り下げた櫓台下の豎穴から浅瀬の泥底どろぞこへ水を掻き上

げて行くと、岸の堀垣ほりがきの毀れから崩れ落ちた土が不規則なスロ

ープになつて水底へ影をひくのが朦朧と目に写つて来た。

この辺一体に藻や蘆の古根が多く、密林の感じである。材木繋留の太い古杭が朽ちてはうち代えられたものが五六本太古の石柱のように朦朧と見える。

その柱の一本に掴つて青白い生ものが水を掻いている。薫だ。

薫は小初よりずっと体は大きい。顎や頬が涼しく削げ、整った美しい顔立ちである。小初はやにわに薫の頸と肩を捉えて、うす紫の唇に小粒な白い歯をもつて行く。薫は黙つて吸わせたままに、足を上げ下げして、おとなしく泳いでいたが、小初ほど水中の息が続かないので、じきに苦悶の色を見せはじめた。それからむやみに水を掻き裂きはじめた。とうとう絶体絶命の暴れ方をしだし

た。小初は物馴ものなれた水に溺おぼれかけた人間の扱あつかい方で、相手に纏まといつかれぬよう捌さばきながら、なお少しこの若い生ものの魅力の精をば吸い取った。

借家を探しに行つた父親の敬蔵が帰つて来て雨上りの水泳場で父娘二人きりの夕飯が始まつた。借家はもう半月もして水泳場が閉鎖へいさすると同時にたちまち二人に必要なのだが、価値の釣り合あいなどで敬蔵はなかなか見つけかねた。場所はまだ下町の中央に未練があつて、毎日、その方面へ探しに行くらしかつた。帰つて来たときの疎髯そぜんを貯えた父の立派な顔が都会の紅塵こうじんに摩擦まさつされた興奮と、疲れつかとで、異様に歪ゆがんで見えた。もしかすると、どこ

かで一杯いっぱいひっかけた好きな洋酒の酔よいがまだ血管の中に残っているのかも知れない。

都会育ちの美食家の父娘は、夕飯の膳ぜんを一々伊勢丹いせたんとかその他すゞき洲崎界隈の料理屋から取り寄せた。

自転車おかもで岡持ちおかもを運んで来る若者は遠路をぶつぶつ叱言こいごといったが、小初の美貌と、父親が宛あてがう心づけとで、この頃ごろはころころになつて、何か新らしく仕込んだ洒落しやれの一つも披露ひろうしながら、片隅かたすみの焔炉こんろで火を焙おこして、お椀わんの汁しるを適度に温め、すぐ箸はしが執とれるよう膳ならを並べて帰って行く。

「不味まずいものを食うくらいならいっそ、くたばった方がいい」
これは、美味のないうとき、膳ばとうの上の食品を罵倒する敬蔵の云い

草だが、ひよつとすると、それが辛辣しんらつな事実で父娘の身の上の現実ともなりかねない今日この頃では、敬蔵もうつかり自分の言こととばぐせ葉癖は出しにくかった。父娘は夜な夜な「最後の晩餐ばんさん」という敬虔けいけんな気持で言葉少なに美味に向った。

いったいが言葉少なの父娘だった。わけて感情を口に出すのを敬蔵は絶対に避さけた。そういうことは嫌味いやみとして旧東京の老人はついにそれに対する素直な表現欲を失っていた。感情の表現にはむしろ反語か、遠廻しの象徴しょうちようの言葉を使った。

となり「隣近所にお化粧けしょうのアラを拾うやつもなくてさばさばしたろう」これが唯ゆい一いつの、娘も共に零落れいちらくさせた父の詫わびの表明でもあり、心やりの言葉でもあった。小初は父の気持ちを察しないでは

ないが、「何ほ何でもあんまり負け惜しみ過ぎる」と悲しく疎ま
れた。

今夜はまたとても高踏的な漢籍かんせきの列子の中にあるという淵ふちの話を持ち出して父は娘に対する感情をカモフラージュした。

「淵には九つの性質がある。静水をじつと湛たたえているのも淵だ。

流れて来た水のしばらく淀むところも淵だ。底から湧いた水が豊かに溜り、そしてまた流れ出るところも淵だ。滴したたつて落つる水を受け止めているのも淵だ——」

父親は大体こんなふうに淵が水を受け入れる諸条件を九つの範はん疇ちゆうにまとめて、

「これを九淵の説と云つて、水はいろいろの変化で向うが、それ

を受け容れる淵はたった一つなのだ。この淵の無心な気持ちにな
 っていれば世間がどう変りこつちにどう仕向けようと、余悠よゆうしやく
 綽しやく々なのだ。こここのところをわが青海流では、

死屍しし水かかずしてよく浮く

といって、平泳ぎのこころだ」

「それは、よくおとうさんがおつしやる、あの渾沌未分の兄弟か
 何かなの」

小初は食後の小楊枝こようじを使いながら父親を弥次やじつた。自分が人を
 揶揄やゆすることを好んで人から揶揄やゆされることを嫌うのは都会的諷ふう
 刺家うしかの性分で、父親はそれが娘だとぐつと癩しやくに触さわつた。しばらく
 黙もくっていたが、跳ね返す警句を思いつく氣力もなく、

「兄弟分でもなんでもない、全く一つのものだ」

と低い声音に渾身の力を籠めて言った。これだけ真面目に敬蔵が娘に云うことはめつたにない。窮してやむを得ずこれだけまともと言つたのだ。そのせいか、彼はそのあと急に気まりの悪い衰えた顔つきをして、そつと汗を拭いた。

父親は電球の紐を伸して、水泳場の下へ入つて行つた。そこでしばらくごそごそしている様子だった。

「いい具合に宵闇だ。数珠子釣りに行つて来るかな」

そういつて、道具を乗せて田舟を漕ぎ出して行つた。父のその様子を、小初は気の毒な儂い気持ちで見送つたが、結局何か忌々しい気持ちになった。そして一人留守番のときの用心に、いつ

ものように入口に鍵かぎをかけ、電燈でんとうを消して、蚊帳かやの中に這はい入り、
 万しの一忍こび込むものがあるときの脅おどしに使う薄荷はつか入りの水ピストル
 を枕まくらもと元へ置いた。小初は横になり体を楽にするとピストルの
 薄荷はつかがこんこん匂におった。こんこん匂う薄荷が眼鼻しに沁わたみ渡ると小
 初は静かにもう泣いていた。思えば都会偏へんあい愛あいのあわれな父娘だ。
 それがため、父はいらだたしさにさもしく老衰ろうすいして行き、自分
 は初恋から卑いやしく五十男に転換てんかんして行く……。くらやみの中で
 自分の功利心がぴっかり眼を見開いているのに小初の一方の心で
 は昼間水中で味あじわった薫の若い肉体との感觸おもを憶い出している……。
 少したつと小初はまた起き上った。父の様子を見ようと裏口の
 窓を開けた。雨上りの夜の天地は濃こい墨色すみいろの中にたっぷり水気

を溶^として、艶^{つや}っぽい涼^{りやう}味^みが潤^{じゆん}沢^{たく}だった。下^さげ汐^{しお}になつた前^ま
 えかが
 屈^{ひらめ}みの櫓^{りゆう}台^{だい}の周^{しう}囲^いにときどき右^{みぎ}往^{かう}左^さ往^{かう}する若^わ鰯^{かいな}の背^せが星^{せい}明^{めい}り
 に閃^{ひらめ}く。父^{ちち}はあま^あり遠^{とほ}くない蘆^{あし}の中^{なか}で、カ^カンテ^{ンテ}ラを燃^もして数^{かず}珠^{しゆ}子^し
 釣^つりをや^やつてい^いる。洲^{しう}の中^{なか}の環^{かん}虫^{ちゆう}類^{るい}を糸^{いと}にた^たくさん貫^{つらぬ}いて、
 数^{かず}珠^{しゆ}輪^{りん}のよう^{よう}にし^して水^{みづ}に垂^たらす。蘆^{あし}の根^ね方^{かた}に住^すんでい^いる小^{せう}鰻^{なぎ}がそ
 れに取^とりつ^つく、環^わをそ^そと引^ひき上^あげ^げて、未^み練^{れん}に喰^くい下^{くだ}つて来^きる小^{せう}
 鰻^{なぎ}を水^{みづ}面^{めん}近^{きん}くま^までおび^おき寄^よせ、わ^わきか^から手^て網^{あみ}で、さ^さつと掬^{すく}い上^あげ
 る。環^{わん}虫^{ちゆう}類^{るい}も何^{なん}だか虫^{むし}の中^{なか}では醜^{みにく}い衰^{すい}亡^{ぼう}者^{しや}のよう^{よう}に思^{おも}えるし、
 鰻^{なぎ}だ^だとて、や^やはり時^{とき}代^{だい}文^{ぶん}化^かに取^とり残^{のこ}され^れたよ^ような魚^{いさな}ではな^ないか。
 衰^{さい}亡^{わう}の人間^{にんげん}が衰^{さい}亡^{わう}の虫^{むし}を罔^{おとり}につ^つか^かつて衰^{さい}亡^{わう}の魚^{いさな}を捉^{とら}えて娛^{たの}しみに
 する。その灯^{あかり}明^{めい}り——何^{なん}と憐^{あわ}れ深^{ふか}い情^{じやう}景^{けい}であ^あらう。む^むかし父^{ちち}親^{おや}に

とつてこの方法の鰻取りは単なる娛しみに過ぎなかったが、今は必死の副業である。

「ゆうべ、少し漁れ過ぎてね。始末に困るんだよ」

こんな鷹揚おうようなもの云い方をしながら父親は獲物えものを鰻仲買なかがいに渡した。憐れな父子と思いながら小初はいつか今夜の父の漁れ高を胸に計算していた自分が悲しかった。

西空は一面に都会の夜街の華々はなばなしいものが踊りつ、打ち合いつ、砕けつくだする光の反射面むらのようである。特に歓楽の激しい地域を指示するように所々に群るネオンサインが光のなかへ更に強い光の輪郭りんかくを重ねている。さらにこの夜空のところどころにときどき大地の底から発せられるような奇矯ききような質を帯びた閃光せんこうが

ひらめいて、琴の^{こと}かえ手のように幽^{ゆう}毅^ぎに、世の果ての審^{しん}判^{ぱん}のよ
うに深刻に、夜景全局を刹那に地獄^{じごく}相^{そう}に変^{へん}貌^{ぼう}せしめまた刹那
にもとの歡樂相に^{もと}戻す。それは何でもない。間近い城東電車のポ
ールが電力線にスパークする光なのだが、小初は眺^{なが}めているうち
に——そうさ、自分に關係のない歡樂ならさつきと一閃^{ひらめ}きに滅^{ほろ}び
てしまうが^{すべ}いい、と思^とつた。そのときどこからともなく、ハイヤ
ーの滑^{すべ}つて来る轟^{とどろ}がして、表通りで停^とまつたらしい。
が^{のぼ}つしりした男の足音が、水泳場の方へ昇^{のぼ}つて来た。

「どなた」

貝原が薄暗のなかでちよつとはにかんだような恰^{かつ}好^{こう}で立ち止
つた。

「私ですよ。少し遅おそくなりましたが、街へ踊りに出かけましょう。出ていらつしやいませんか」

「なぜ、裏うらばしご梯子から上つていらつしやらないの」

「薄荷水をピストルで眼の中へ弾はじき込まれちゃかありませんからなあ」

小初は電球を捻ひねつて外出の支度をした。筆筒たんすから着物を出して、荒削あらけずりの槓まきばしら柱なわに縄くくで括りつけたロココ式の半姿見へ小初は向つた。今は失くした日本橋の旧居で使つていた道具のなかからわずかに残しておいたこの手のこんだ彫刻縁ぶちの姿見で化粧をするのは、小初には寂しい。小初はまた貝原に待たれているという意識から薫のことがしとしと身に沁みて来た。だがそれはほんの

肉体的のものである。少くともいまはそう思い直さねばならない。くず折れてはならない。すべては水の中の気持で生きなければならぬ。向つて来るものはみんな喰べて、滋養じようにして、私は逞たくまましい魚にならなければならない。小初はぐつと横着な気持になつて、化粧の出来上つた顔に電球を持ち添そえて

「これでは、どう」と窓の葦簾張よしずりから覗のぞいている貝原に見せた。「結構ですなあ。さあ出かけましょう。老先生には許可を得てますよ」

小初は電燈を消して、洲の中の父の灯をちよつと見返つてから、貝原と水泳場を脱け出した。

貝原は夏中七八遍ぺんも小初を踊りに連れ出したことがあるので、ちよつとした小初の好きな喰べものぐらい心得ていた。浅夜に瀟洒な鉄線を組み立てている清洲橋を渡つて、人形町の可愛かわいらしい灯の中で青苦こうきい香氣のある冷し白玉を喰べ、東京でも東寄りの下町の小さい踊り場を一つ二つ廻つて、貝原はあつさり小初の相手をして踊る。

この界隈の踊り場には、地つきの商店の子弟が前まえ垂だれを外して踊りに来る。すこし馴染なじみになつた顔にたまたま小初は相手をしてやると、

「へえ、へえ、済みません」

お客にするように封建ほうけんてき的な揉み手もてをして礼をいう。小初はそ

れをいじらしく思つて木屑臭い汗きくずくさの匂においを我慢がまんして踊つてやる。

ときどき銀座界限へまで出掛でかけることもある。そうすると今度

はニュー・グランドとか風月堂とかモナミとか、格のある店へ入る。そのロツジ寄りに席を取つて、サッパーにしては重苦しい、豪華な肉食をこの娘はうんうん摂とる。貝原は不思議がりもせず、小初をこういう性質もある娘だと鵜呑うのみにして、どっちにも連れて行く。

月が、日本橋通りの高層建築の上へかかる時分、貝原は今夜は珍めずらしく新川河岸かしの堀に臨む料理屋へ小初を連れ込んだ。

「待合まちあい？」

小初は堅気かたぎな料理屋と知つていて、わざと呆とぼけて貝原に訊きいた。

貝原は何の衝動しょうどうも見せず

「そんなところへ、若い女の先生を連れて来はしません」と云つた。

「でも、いま時分、こんなに遅く、いいのかしらん」

「なに、ちつとばかり、資金を廻してある家なので、自由が利くんです」

涼しい食物の皿さらが五つ六つ並んで、腹の減った小初えんりよが遠慮なく箸を上げていると、貝原はビールの小壺こびんを大事そうに飲んでゐる。ぽつぽつ父親の噂うわさを始めた。

「どうも、うちの老先生のようじゃ、とても身しん上しょうの持ち直しは覚束おぼつかないですねえ。事業というものは片つぽうで先走った思

い付きを引締めて、片っぽうはひとところへ嚙り付きたがる不精な考えを時勢に遅れないように掻き立てて行く。こここのころがちよつとしたこつです。ところが、老先生にはこの両方の極端のところだけあって、中辺のじつくりした考えが生れ付き抜けていなさる。これじゃ網のまん中に穴があるようなもので、利というものは素通りでさ」貝原は、父親には、反感を持っていないようなものの、何の興味もないらしい口調だった。

「あたし、何にも知らないけれど、あんた、この頃でもうちの父に、何かお金のことで面倒を見ているの」

「いや、金はもう、老先生には鏝一文出しません。失くなすのは判っているんだから。それに老先生だって、一度あたしが保証

の印を捺おして、いまでもどんなに迷惑めいわくしているか、まさか忘れもしなさらないと見え、その後何にもいい出しなさはしません
がね」

貝原は宮大工上りの太い手首の汗をカフスに滲にじませまいとして、ぐつと腕うで捲まくりして、煽風器せんふうきに当てながら、ぽつりぽつり、まだ、通しものの豆を噛かんでいる。

小初は一しきり料理を喰べ終ると、いかにも東京の料理屋らしい洗煉せんれんされた夏座敷をじろじろ見廻しながら、

「あなた、道楽なさったの」と何の聯想れんそうからかいきなり貝原に訊いた。

「若いときはしました。しかし、今の家内を貰もらってから、福沢ふくざわ

宗しゅうになりましてね、堅蔵かたぞうですよ」

「お金をたくさん持って面白い」

「何とか有効に使わなくちゃならないと考えて来るようになったちや、もう面白くありませんな」

「そう」

小初は、もう料理のコースの終りのメロンも喰べ終つて、皮にたまった薄青い汁を小匙こさじの先で掬すくっていた。

ふつとした拍子ひょうしに貝原と小初は探り会う眼を合せた。

「今夜、何か話があるの」

小初の義務的な質問が、小初の顔立ちを引締まらせた。小初がずっと端麗たんれいに見える。その威厳いげんがかえつて貝原を真向きにさせ

た。貝原は悪びれず、

「相当な年配の男のことですから、あなたも本気で聴^きいて下さい。これは家内とも相談しての上ですから——まあ、私だちちつぽけなりにも身上も出来てみれば、出来のいい品のある子供が欲しいです。うちに一人ありますが、ひと口に云うとから駄^だ目^めなのです。人を扱いつけてる職業ですから私にはすぐ判ります。血筋というものは争われません。何代か前からきつと立派な血が流れて来いて、それが子孫に現われて来るんですね」

「これは家内とも相談ですが」と貝原は再び儀式的の掛け合いのように念を押して、

「小初先生。世の中には、相当な知識階級の女でも、何か資金の

都合のため、人の世話になるという手があります。先生をおもちやにする気は毛頭ありません。あなたの持つている血筋をここに新らしく立てる私の家の系図へちつとばかり注ぎ入れて頂きたいのです」

貝原の平顔は両顎がやや張つて来て、利を掴むつかときのような狡猾うかつな相を現わして来た。がそれもじきにまた曖昧あいまいになり、やがて単純な弱気な表情になつて、ぎごちなく他所見よそみをした。

小初は貝原の様子などには頓着とんじゃくせず、貝原の言葉について考え入った。——自分の媚を望むなら、それを与えましょう。肉体を望むなら、それを与えましょう。魂があると仮定して、それを望むなら与えましょう。自分がこの都会の中心に復帰出来るた

め的手段なら、総てを犠牲に投げ出ししよう。だがこの宮大工上りの五十男の滑稽な申込みようはどうだ。

「貝原さん、子供が欲しいなんて云わずに真直ぐに私が欲しいと云ったらどうですの」

「ああ。そうですか。でもあんまり失礼だと思ひまして」

貝原がようやくまともに向けた顔を真直ぐに見て、さびしい声で小初は云った。

「それで子供を生んでもらうためなんてしらじらしい、ありきたりの嘘を云ったのですか。失礼とか恥かしいとか云っている世の中じゃないと思うわ。そんなことに捉われていたから、東京人は田舎者にずんずん追いこくられてしまったのよ。私たち必死で都

会を取り返さなけりやならないのよ」小初はきつい眼をしながら云い続けた。「それには私達、どんな取引きだつてするというのがよ」

小初のきつい眼から涙が二三滴落ちた。なみだ貝原は身の置場所もなくきようしゆく縮した。小初は涙を拭いた。そして今度はすこし優しい声音で云つた。

「でも貝原さん、何もかも遠泳会過ぎにして下さい、ね。私、あなたのいい方だつてことはよく知つてるのよ」

かわも二三日晴天が続いた。川上はだいぶ降つたと見えて、放水路のあかつちいろ川面は赭土色を増してふくれ上つた。中川放水路の堤の塔門型

の水門はきりつと閉った。水泳場のある材木堀も境界の蘆洲の根方もたつぷりと水嵩みずかさを増した。

普通の顔をして貝原は毎日水泳場へ手伝いに来た。自分の持ちものの材木の流出を防いだり櫓台いかりの錨いかりに石を結びつけたりした。そして見ないような振りふをして、やつぱり小初の挙動に気をつけていた。

小初は四日目に来た薫を、ちよつと周囲から遠ざかった蘆洲の中つかやまの塚山へ連れて行つた。二人は甲羅干こうらぼしの風をしながら水着のまま並んで砂の上に寝ねそべつた。小初は薫を詰なるように云つた。「あんた、何でもあたしの方から仕向けなければ……ずる狡いのか、意気地いくじなしなのか、どっちなのよ」

小初の言葉のしんにはきりきり真面目さが透とおつていながら手つきはいくらかふざけたように、薫の背筋の溝みぞに砂をさあつと入れる。

「よしよ。僕ぼく、今日苦しんでるんだ」

薫は肘ひじで払い除のけるが、小初は関かまわず背筋へ入れた砂をぽんぽんと平手で叩たたき均ならして、

「ちつとも苦しんでるように見えないわ」

「この間、水の中で君に………、こんなに腫はれた」

薫は黒くなっている唇の角をそうつと大事に差し出して見せる。

「あら、それで怒おこってるの」

「違う——君はとても強い。なまじつかなこと云い出せないもの」

じりじりと照りつける陽の光と腹匍はらばいになつた塚の熱砂の熱さとが、小初の肉体を上下から挟はさんで、いおうような苦痛の甘美かんびに、小初を陥おとしれる。小初は、「がつたん、すつとこ、がつたん、すつとこ」そういうしながら、あらためて前に組み合せた両肘の上しもぶくに下膨れの顔を載のせて眠ねむりそうな様子をする。

「なに、云つてるの」

「機械のベルトの音」

ちようど、水泳場と塚山と三角になる地点に貝原の持ちの製板場があつて、機械の止まつているのが覗かれる。

「きゆう、きれきれきれきれ。これは機械鋸のこが木を挽ひく音」

「ふざけるの、よしよ。真面目な相談だよ。僕は知ってる」

「知ってる？ 何を」

「どうせ貝原に買われて行くんでしょう」

「誰^{だれ}が、どこへ」

「知ってる。みんな」

「そんなこと、誰が云った」

「誰も云わない。だけど、僕、その位なこと、わかる男だ」

薫は女のような艶めかしい両腕^{なま}で涙を拭いた。小初は砂金のよう^{こま}に濃かく汗の玉の吹き出た薫の上半身へ頭を靠^{もた}れ薫の手をとつた。不憫^{ふびん}で、そして、いま「男だ」と云ったばかりの薫の声が遠い昔^{むかし}から自分に授^{さづ}か^かけていた決定的な男性の声のような頼母^{たのも}しさを感^うじて嬉^{うれ}し泣きに泣けて来た。

「許す？」

「許すも許さないもありやあしない」

「薫さん、ついておいでよ。東京の真中で大びらに恋をしよう、ね」

小初の涙が薫の手の甲こうを伝って指の間から熱砂のなかに沁み入った。薫はそれを涼しいもののように眼を細めて恍惚こうこつと眺め入っていたが、突然とつぜん野太い男のバスの声になつて

「そりや、貝原さんはいい人さ、小初先生と僕のことだつて大目に見ての上で世話する気かも知れませんか。だけど、僕あ嫌いです。いくら、僕、中学出たての小僧こぞうだつて、僕あそんな意気地無しにあ、なれません」

「じゃあ、どうすればいいの」

「どうも出来ません。僕あ、どうせ来月から貧乏な老朽親

爺に代って場末のエナ会社の書記にならなけりやならないし、

小初先生は東京の真中で贅沢に暮らさなけりやならない人なん
だもの」

ダンスの帰りの料理屋でのいきさつ——小初を世話する約束
のほぼ出来上ったことを貝原は友達である薫の父親にゆうべ打ち
明けに行つたことを薫はどうとう小初にはなした。

薫の弱い消極的な諦めが、むしろ悲壮に炎天下で薫の顔を蒼
く白ました。

「何も、決定的な事じゃあるまいし……」と小初は云つたが語尾

は他人のように声が遠のいて行つた。小初は今日まで、貝原との約束をどう薫に打ち明けようか、思いなやんでいたのである。それに自分だとしてまだ貝原との約束を全然決定し切れない心に苦しめられていたのであるけれど、薫の方から、云い出されてかえつて小初の心はしんと静まり返つてゆくのだつた。そしてだんだん虚脱きよだつに似た無批判になつてゆく心境のなかにいつか涼しい一脈の境界が透とおつて来た。父に聞いた九淵のはなし、友が訳した希ギリシ臘ヤの狂詩——水中に潜む渾沌未分の世界……「どうでもいいわ」……小初はすべてをぶん流したあとの涼やかさを想像した。小初の泣き顔の涙も乾いて遠くの葦の葉ずれが、ひそひそと耳にささやくように聞える。小初はまたしても眠くなつた。

薫は腹はら這いから立ち上った。腰だけの水泳着の浅いひだから綺麗な砂をほろほろ零こぼしながらいい体格の少年の姿で歩き出した。小初はしばらくそれを白日の不思議のように見上げていた。小初は急に突きのめされるような悲哀ひあいに襲おそわれた。自分の肉体のたった一つの謬ごうちやくぶつ着物をもぎ取られて、永遠に帰らぬ世界へ持ち去られるような気持ちに、小初は襲われた。

小初もあわてて立ち上った。小初は薫の後を追って薫の腕へぎりぎりと自分の腕を捲きつけた。

「薫さん、だけど薫さん、遠泳会にはきつと来てね。精いっぱい泳ぎっこね。それでお訣わかれならお訣れとしようよ」

「うん」

「きつとよ、ね、きつと」

「うん、うん」

そして、薫が萎しおれてのろのろと遠ざかつて行くのが今さら身も世もなく、小初には悲しくなった。

小初は元の砂地に坐すわつて薫の後姿を見送った。風のないしんとした蘆洲のなかへ薫の姿は見えなくなつて行つた。

小初は眠れなかつた。急に重くなつて来た気圧で、息苦しく、むし暑く、寝返りばかりうつていたせいでもあるが、とてもじつとしていられない悲しい精力が眠気を内部からしきりに小突き覺えました。傍で寝ている酒気を帯びた父の鼾いびきが喉のどにからまつて苦しうだ。父は中年で一たん治まつた喘ぜん息そくが、またこの頃きざし

て来た。昨^{さつこん}今の氣候の変調が今夜は特別苦しそうだ。明日の遠泳会にも出られそうでない……。だが小初にはそんなことはどうでも、遠泳会の後に控^{ひか}えている貝原との問題を、どう父に打ち明けたものかしらと気づかわれる。薫との辛^{つら}い気持も尾^おをひいているのに、父を見れば父を見るで、また父の気持ちを兼ねなければならぬ……。小初は心づかれが一身に担い切れない思いがする。父は娘を神秘的な童女に思い倣^なして、自家偶像崇拜^{ぐうぞうすうはいよく}慾を満足せしめたい旧家の家長本能を、貝原との問題に対してどう処置するであろうか。自分の娘は超^{ちようじんてき}人的な水泳の天才である。この誇^{ほこ}りが父の畢^{ひっせい}世^{せい}の理想でもあり、唯一^{ゆいいつ}の事業でもあった。そのため、父は母の歿^{ぼつご}後、後妻も貰^{もら}わないで不自由^{しの}を忍んで来たので

あつたが、蔭では田舎者と罵倒ばとうしている貝原から妾めかけに要求され、薫と男女関係まであることを知ったなら父の最後の誇りも希望もむしり落されてしまうのである。

うっかり打ちあけられるものではない……。だが都会人の気の弱いものが、一たんひるがえ翻ると思ひ切った偽悪者になることも、小初はよく下町で見受けている例である。貝原もそれを見越みこして父に安心しているのではないか。案外もろく父もそこに陥おちいらぬとも限らない。陥ちいつてくれることを自分は父に望むのか。それを望むよりほか二人の生きて行く道はないのか……。

船虫が蚊帳の外の床でゆかざわざわ騒さわぐ。野鼠のねずみでも柱を伝つて匍たたい上つて来たのだろうか。小初は団扇うちわで二つ三つ床を叩いて追う。

その音に寝呆^{ねぼ}けて呼びもしない父が、「え？」と返事をして寝返りをうつ、うつろな声。――あわれな父とそしてあわれな娘。

小初は父の脱いだ薄い蒲団をそつと胸元へ掛け直してやった。

小初は闇^{やみ}のなかでぱっちり眼を開けているうちに、いつか自分の体を両手で撫^なでていた。そして嗜好^{しこう}に偏^{かたよ}る自身の肉体について

考え始めた。小初は子供のうち甘いものを嫌って塩せんべいしか偏^{へんあい}愛して喰べようとしなかった自分を思い出した。自分は肉体

も一種を限つてのほか接触には堪^たえかねる素質を持つているのではないかと考えられて来た。自分は薫をさまで心で愛しているとは思わない。それだのになぜこうまで薫の肉体に訣れることが悲しいのか、単純な何の取柄^{とりえ}もない薫より、世の中をずっと苦勞し

て来た貝原にむしろ性格の頼み甲斐を感じるのに、肉体ばかりは
かえって強く離反して行こうとするのが、今日このごろはなおさ
らまざまざ判つて来た。

自分の肉体がむしろ憎い——一方の生活慾を満足させようとあ
せりながら、その方法（貝原に買われること）に離反する。矛盾
と我儘に自分を悩め抜く自分の肉体が今は小初に憎くなつ

た。——こんな体……こんな私……いつそなくなつてしまえばい
い……。小初は子供のように野蛮に自分の体の一ヶ処を捻つてみ
た。痛いのか情けないのか、何か恨みに似たような涙がするする
と流れ出た。また捻つた……また捻つた……すると思考がだんだ
ん脱落していつて頭が闇の底の方へ楽々と沈んで行つた。

小初は朝早く眼が覚めた。空は黄色く濁にごつて、気圧は昨夜よりまだ重かった。寝巻ひとえ一重の肌はうすら冷たい。

「秋が早く来過ぎたかしらん」

小初は独りごちながら窓から外を覗いてみた。
霧もやだ。

よく見ていると霧は水上からだんだん灰白色の厚味を増して来る。近くの蘆洲は重たい露つゆでしどろもどろに倒れている。

今日は青海流水泳場の遠泳会の日なのである。

小初は気が重かった。体もどこか疲れていた。けれども、父親の老先生が朝食後ひどく眩暈めまいを催もよおして水にはいれぬことになってしまったので、小初先生が先導と決った。

十時頃から靄は雨靄と變つてしまつた。けだるい雨がぽつりぽつり降つて來た。

小初は氣のない顔をして少しずつ集つて來る生徒達に応待していたが、助手格の貝原が平氣な顔で見張船の用意に出かけたりする働き振りに妙な抵抗するみよう ていこうような氣持が出て、不自然なほど快活になつた。

「みなさん。大丈夫よ。いまじき晴れて來ますわよ」

小初が赤い小旗を振つて先に歩き出すと、雨で集りの悪い生徒達の団体がいつもの大勢の時より、もつと陽氣にはしや噪ぎ出した。

薫も途中から來て交つた。濡れた道を遠泳会の一行は葛西川かさいがわの袂たもとまで歩いた。そこから放水路の水へ滑りすべ込んで、舟に護まもられ

ながら海へ下って行くのだ。

小初が先頭に水に入った。男生、女生が二列になつてあとに続いた。列には泳ぎ達者が一人ずつ目印の小旗を持って先頭に泳いだ。

水の濁りはだいぶとれたが、まだ草の葉や材木の片が泡あわに混つて流れている。大潮の日を選んであるので、流れは人数のわずかな遠泳隊をついつい引き潮の勢いに乗せて海へ曳ひいて行く。

靄もやに透けてわずかに見える両岸が唯一の頼みだった。小初のすぐあとに貝原が目印の小旗を持って泳いで来る。薫はときどき小初の側面へ泳ぎ出る。黙って泳いでいる。生徒達は今日の遠泳会を一度も船へ上って休まず、コースを首尾しゅびよく泳ぎ終おせれば一級

ずつ昇級するのである。彼等は勇んで「ホイヨー」「ホイヨー」と、掛声を挙げながら、ついて来る。

行く手に浮寝^{うきね}していた白い鳥の群が羽ばたいて立つた。勇み立つて列の中で拔手を切る生徒があると貝原が大声で怒鳴^{どな}った。

「くたびれるから拔手を切っちゃいかん」

河口西側の蘆洲をかすめて靄^{すき}の隙から市の汚水処^{おすい}分場が見え出した。

ここまで来ると潮はかなり引いていて、背の高い子供は、足を延ばすと、爪^{つまさき}先がちよいちよい底の砂に触れた。

小初は振り返って云った。

「さあ、ここからみんな抜き手よ」

やがて一行は扇形おうぎに開く河口から漠々ばくばくとした水と空間の中へ

泳ぎ入った。小初はだんだん泳ぎ抜き、離れて、たった一人進んでいるのか退いているのか、ただ無限の中に手足を動かしている気がし出した。小初が無闇に泳ぎ抜くのは、小初が興奮しているからである。初め小初は時々自分の側面に出て来る薫の肉体に胸が躍おどった。が、その感じが貝原の小初を呼び立てる高声に交り合ううち、両方から同時に受ける感じがだんだんいまわしくなつて来た。反感のような興奮がだんだん小初の心身を疲らせて来ると薫の肉体を見るのも生々しい負担になつた。貝原の高声もうるさくなつた。小初は無闇やたらに泳ぎ出した。生徒達の一行にさえ頓着なしに泳ぎだした。するうち小初に不思議な性根しょうねが据すわつて

来た。

こせこせしたものは一切抛なげ捨ててしまえ、生れたてのほやほやの人間になつてしまえ。向うものが運命なら運命のぎりぎりの根元のところへ、向うものが事情なら、これ以上割り切れない種子のところ^{かけね}に詰め寄つて、掛値なしの一騎^{いっきうち}打の勝負をしよう。この勝負を試すには、決して目的を立ててはいけない。決して打算をしてはいけない。自分の一切を賽^{さい}にして、投げてみるだけだ。そこから本当に再び立ち上がれる大丈夫な命が見付かつて来よう。今、なんにも惜おしむな。今、自分の持ち合せ全部をみんな抛なげ捨てろ——一切合財を抛なげ捨てろ——。

渾沌未分……………

渾沌未分……………

小初がひたすら進み入ろうとするその世界は、果てしも知らぬ
はくたく白濁の波の彼方かなたの渾沌未分の世界である。

「泳ぎつく処ところまで……………どこまでも……………誰も決して
ついて来るな」

と口に出しては云わなかったが、小初は高まる波間に首を上げて、
背後の波間に二人の男のついて来るのを認めた。薫は黙って
抜き手を切るばかり、貝原は懸命けんめいな抜き手の間から怒鳴り立て
た。

「ばか……………どこまで行くんだ……………ばか、きちがい……………小初……………先

生……小初先生……ばか……ばか……」

風の加った雨脚あまあしの激しい海の真只まっただなか中だ。もはや、小初の背後の波間には追って来る一人の男の姿も見えない。灰色の恍惚からあふれ出る涙をぼろぼろこぼしながら、小初はどこまでもどこまでも白濁無限の波に向って抜き手を切って行くのであった。

（昭和十一年九月）

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 岡本かの子」筑摩書房

1992（平成4）年2月20日第1刷発行

1998（平成10）年3月15日第2刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集」冬樹社

1974（昭和49）年～1978（昭和53）年

初出：「文芸」

1936（昭和11）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：土屋隆

校正：門田裕志、小林繁雄

2007年8月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

渾沌未分

岡本かの子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>